

一票でつなぐ、私たちと未来

都城・北諸県支会代表 大路 古都寧

「ねえ、政治に興味ある？」

友達にそう聞かれたとき、私は答えに詰りました。「興味がある」と言うにはまだ知識が足りない。でも、「ない」と答えるのはどこか違う気がする。目の前にある社会の問題、たとえば気候変動や教育の格差、将来の年金制度といった課題に、自分がどう向き合えばいいのか分からず。漠然とした不安の中で、「選挙で一票を投じる日が来たら、私は何を基準に選べばいいのだろう」という疑問が頭をよぎりました。そんな私が、街頭での選挙啓発キャンペーンにボランティアとして参加したのは、自分自身と未来を見つめ直す大きなきっかけとなりました。

その日、私は街頭でティッシュやパンフレットを配りながら、「選挙に行きましょう！」と道行く人々に声をかけました。蒸し暑い日差しが肌にまとわりつき、額にはじわりと汗が滲む中で通り過ぎる人々の反応はさまざまでした。無関心そうに通り過ぎる人、チラシを受け取ってもすぐにポケットにしまう人。そんな中で「頑張ってね」と笑顔で声をかけてくださる方もいました。

さらにその日、母と話をしたときに深く心に残る言葉がありました。「お母さんは若い頃、選挙なんて関心がなかったけれど、家族がでてからは行くようになったよ。自分の子どもたちが安心して暮らせる社会になってほしいからね」。その言葉を聞いた瞬間、私はハッとしました。それまでの私にとって、選挙はどこか他人事のようなものでした。でも、この言葉を聞いて、「選挙に行く」という行為が、単なる義務でなく、自分の家族や未来の世代を守るために大切な行動だと気づかされたのです。

また、生徒会活動を通して「選ばれる側」という立場を経験する機会がありました。生徒会役員選挙の際、私は候補者として立候補し、「学校をより良い場所にしたい」という思いを胸に、「生徒全員にかけがいのない青春を」という公約を掲げ、選挙活動に挑みました。初めての演説では、緊張で声が震え、言葉に詰まる場面もありましたが、何度も何度も練習を重ね、友人たちからの応援を受けたことで自分の思いをしっかりと言葉に乗せることができました。その過程で感じたのは「声を届けること」の難しさと大切さです。どんなに良いアイデアがあっても、それを人に伝えられなければ、共感は生まれません。逆に、共感が生まれることで一人ひとりの心に変化が起き、それが大きな力となるのです。

この経験から、私は「政治」も同じだと考えるようになりました。候補者は有権者に向けて、自分の政策や信念を分かりやすく、誠実に伝える努力をすべきです。一方で、有権者もその声を真剣に受け止め、情報を集め、自分の考えを持って投票することが求められます。選挙とは、一方通行のことではありません。候補者と有権者が双

方向に意思を交わす場こそが選挙であり、それこそが民主主義を動かす原動力なのです。

未来の有権者として、私が願う政治は、すべての人が「自分の意思」で参加できるものであってほしいということです。そのためには、私たち若い世代も積極的に政治や社会の課題に目を向け、自分の意見を磨き続ける必要があります。同時に、候補者側にも若者が関心を持てるような政策や活動を示してほしいと願います。

社会全体が政治を「自分ごと」として捉えられるよう整うことが、より良い未来を作る第一歩なのではないでしょうか。街頭キャンペーンで感じた選挙への関心の多様さ、そして母の言葉から学んだ「次の世代への責任」、さらには生徒会活動を通して学んだ「声を届ける難しさとその力」。これらの経験は、私の中で政治や選挙への意識を大きく変えてくれました。

「未来を作るのは、今を生きる私たちの一票。」この言葉を胸に、未来の有権者として、今できることに全力で取り組みます。この一票が私たちを、そして未来をつなぐ力になると信じて。